（５） 心理的な配慮・心のケア・QOL 研究グループ

ア． 研究主題

「将来の QOL 向上を目指した指導」

イ． 課題設定の理由

本校児童生徒は、併設する独立行政法人国立病院機構八雲病院から通学している。神経筋疾患の児童生徒が多く、人工呼吸器の常時使用など医療的配慮を必要とする児童生徒も在籍している。教育課程は小・中・高等学校の学習指導要領に準ずる教育を A 類型、いわゆる知的教科代替の教育を B 類型、いわゆる自立活動を主とした教育を C 類型と分類し、学習形態は児童生徒の実態に応じて登校しての学習、ベッドサイドでの学習、訪問教育となっている。卒業生の多くは継続療養となり、病棟での生活が続くことから、当グループでは卒業後の姿や生活を見据えた教育・指導の在り方について検討することとした。「QOL（Quality of Life）＝生活の質」に着目し、QOL 向上に必要な要素とは何か、それらをどの様に学校教育の中で育てていくかを明らかにし、本校児童生徒の質の高い生活を「充実した病棟生活」と定義した。充実した病棟生活は一人一人の実態により異なるが、教師の願う卒業後の姿として A・B 類型は「生きがい/やりたいことを持っている」「精神的自立をしている・社会性を身につけている」「良好な人間関係を築くことができる」、C 類型は「楽しみ（好きなこと）をもつ」「周囲の状況を受け入れることができる」「人との関わりを楽しむことができる」などを考えた。QOL 向上には学校の役割と病院の役割とがあり、連携しながら取り組んでいくことが効果的だと考える。そこで、学校教育に求めるものや卒業までに身につけるべき力を明確にすることを目的として、本校卒業生と併設病院職員を対象としたアンケート調査を計画し、質問紙の検討等準備を進めていたが実施することはできなかった。そこで、本研究ではこれまでの本校での教育実践を整理することで、QOL 向上に必要な資質・能力を明確にし、各教科・領域等での授業改善や学部・学級、保健室経営に役立てることができるよう主題を設定した。

ウ. 仮説

教師が児童生徒の将来の QOL 向上に繋がる資質・能力を明確に意識して指導を行うことで、卒業後、より豊かな生活が送れるのではないか。

エ. 研究方法および推進計画

［研究方法］

当グループ構成員の各実践を整理し、QOL 向上に必要な資質・能力を明確にするとともに、指導法や指導の機会について検討する。

［推進計画］

グループ構成員の各教科での実践を整理する。

オ. 研究のまとめ

1　実践報告

（1）保健体育

活　動	ねらい	手立て
話し合い活動	・自信をつけることで挑戦する姿勢の育成 ・リーダー体験による積極性の育成	リーダーを決め、作戦会議等、話し合いの場面を意図的に設ける。必要に応じて教師による支援を行う。
スティックスポーツ	・生涯スポーツの推進 ・ルールの工夫 ・補助具の工夫	スティックを使った競技（ホッケー・バスケ・バレー等）を行った。
カーリング	・相互理解 ・コミュニケーション力の向上 ・ミスしたときの切り替えとフォロー力の向上 ・努力の重要性の理解 ・伝える力の向上	お互いに協力しながら取り組み、仲間と一緒になって作戦や戦略を考え、勝利を目指すことを重点的に指導した。
ハロウィック水泳法を取り入れた水泳学習	・コミュニケーション能力の向上 ・心理的安定 ・ゲームを通して水泳の楽しさを味わう	ゲームプログラム（じゃんけん列車、円陣パス等）を通し、他者とのやりとりや名前を呼び合う活動を行った。
	・心理的安定 ・リラックス効果（力を抜く体験） ・水への恐怖心の軽減	音楽を使ってリラックスした雰囲気の中、気持ちを落ち着かせること・体の力を抜くことを指導し、水に浮く体験へとつなげた。
	・意欲の向上 ・達成感を味わう ・自己効力感の向上（できる！と思える体験）	最高レベルは「背浮きマスター」「潜りマスター」と称し、レベルを設けて背浮きと潜りのテストを実施した。3回の水泳学習終了後には認定証授与式を行った。

（2）国語

活　動	ねらい	手立て
意見発表会	・伝えたい意欲の向上 ・文章表現力の向上 ・相互理解	「自分の考えを伝える」「相手を理解する」を目標に作文指導、演説指導を行った。

物語系制作 紙芝居・小説・4コマ漫画・詩	・作文量の向上 ・表現力の向上 ・生涯活動の充実	起承転結、表現技法の学習から制作につなげる。 制作物は貼り出し、また代表作を発表した。
ディベート 話し合い・会議の取り組み方	・根拠をもった意見の述べ方の向上	取り組み方法を提示し、ルールに従い取り組んだ。
読書	・余暇の充実 ・表現力の向上 ・知識の獲得	読書の時間の設定など、読書活動の推進を行った。

（3）社会

活　動	ねらい	手立て
世界遺産について 歴代の総理大臣について 戦国武将について 都道府県について	・情報収集力の向上 ・知識の拡大 ・伝える力の向上 ・机上旅行 ・計画性の向上	インターネットで調べ、発表する場を設けた。また、クイズを作成することを通し、お互いに調べた内容を深められるよう配慮した。
選挙について	・情報収集力の向上 ・知識の拡大 ・社会とのつながりの意識	選挙の流れ、投票について学習し、生徒一人一人が各政党のマニュフェストをまとめた。
裁判について	・伝える力の向上 ・問題の発見力の向上 ・コミュニケーション力の向上	裁判員制度や裁判の仕組みや流れを学習し『昔話法廷』を題材に行った。

（4）生活単元学習

活　動	ねらい	手立て
名前や物の読み書き	・単語を読む力の向上 ・自分の名前の認識	本の読み聞かせにおいて、文章の文字を指でなぞりながら読む。 漢字で書かれた自分の名前を繰り返し読む。
対人関係スキル	・コミュニケーション場面の不安解消	うまく言葉で表現できない場面で生徒の心に寄り添いながら指導し、言葉を引き出していく。
季節のイベント 豆まき・七夕・クリスマス他	・季節を楽しむ ・企画力の向上	豆まき会やひな祭り会などを企画し、児童生徒や職員を招待する活動を行った。

（5）道徳

活　動	ねらい	手立て
ベルマーク回収への取り組み	・社会貢献し感謝される体験をすることによる、自己肯定感・自己有用感の育成	学校職員や病棟への呼びかけ等の依頼を行い、ベルマーク回収活動に取り組んだ。

（6）自立活動

活　動	ねらい	手立て
ストレス発散について	・情報収集力の向上 ・ストレス対処方法の向上 ・視野の拡大 ・メンタル面のケア	ストレスについて学習し、ストレスとうまく付き合うための方法を教師と一緒に模索した。
性教育	・相互理解 ・異性の理解 ・心の成長 ・思春期の心の変化への気付き ・知識の拡大	男女の体の違いや異性との付き合い方、性行為について学習した。
将来の生活を豊かにする活動 作詞・小説・ゲーム制作・資格取得　他	・余暇の充実 ・生涯活動の拡大 ・意欲の向上	生徒が趣味や特技としている活動をさらに深めたり発信したりする活動や、進路や就職に関わる資格取得について指導した。

（7）行事

活　動	ねらい	手立て
体育祭種目練習	・協調性 ・主体性	他学部の仲間と協力し、励まし合うよう指導した。技能向上の方法を自ら考えさせる時間をとった。
学校祭発表練習	・不安軽減	ステージ発表における台詞練習を繰り返し行った。
就労体験学習	・達成感 ・意欲の向上 ・やりがい・生きがい	地域の方から依頼されたものを、グループに分かれ分担し作成した。依頼者のことを考えて作成するよう指導した。
他校との交流学習	・適切な言葉遣い ・挨拶 ・依頼力の向上	初対面の人との活動を通して、適切な言葉遣いや挨拶について指導した。
遠隔による交流学習	・経験の拡大 ・将来への可能性のヒント	町内の中学校とインターネット回線を結び遠隔での授業交流を行った。

見学旅行	・経験の拡大 ・視野の拡大 ・思い出の共有 ・マナー・礼儀 ・学習とのつながり	各学部で事前学習を行い、見学旅行へ行く目的の確認や、安全に過ごすための注意事項の確認、公共の施設を利用する上でのマナーや挨拶、班編制や学習したいことの調べ学習などに取り組んだ。

（8）教材教具・支援機器

活　動	ねらい	手立て
体育で使用する教材・補助具の作成（スティック・車いす装着型バレースパイカー・木製カーリング）	・競技に参加できる充足感 ・健康や体力の維持増進 ・補助具等を用いて競技を行うことで得られる「快」情動（ボールを芯で捉えたインパクト、アタックコースが見えた感覚等） ・達成感 ・満足感 ・補助具により無理な身体の酷使を避け、余裕を持って取り組む姿勢 ・学習意欲の向上（「適切な工夫をすれば自分はスポーツに参加できる」ということを『知っている』ことでやる前にあきらめることが減るのではないか） ・依頼力の向上 ・挑戦する姿勢	児童生徒一人一人の希望の聞き取りや考えたデザイン案を取り入れながら製作を行った。回数を重ねるごとに話し合いながら少しずつ変更を加え身体的特徴に応じたものになるよう配慮した。 授業終了後は「工夫をすればできる」ということに着目した振り返りをし、改善点について一緒に考えた。 また、壊れた場合等は学級担任と協力しながら修繕を自ら依頼できるよう支援を行った。
支援機器	・活動の拡大 ・依頼力の向上 ・自主性・主体性の向上	児童生徒の実態に合わせ、パソコン台やパソコンラック、マウスの調整、スイッチ制作などを行った。

（9）保健室対応

活　動	ねらい	手立て
来室対応	・人に相談する力の育成 ・自発性の向上 ・伝える力の向上 ・挨拶 ・気持ちの切り替え ・クールダウン ・リラックス/息抜き	来室時には、児童生徒の言葉で症状や要求を説明してもらうことを意識して取り組んだ。頑張りすぎてしまう生徒には心の不調にも休むことが必要であることや、いつでも話を聞かせてほしいという旨を伝え、学級担任と連携しながら雑談をしに保健室に来室することから始めた。休み時間に来室する児童生徒には個別に話を聞き、気持ちを切り替えて次の授業へ臨めるよう支援した。
個別保健指導（45 分）	・アンガーマネジメント（怒りの感情のメカニズムの理解。自身の怒り方の自覚。周囲へ与える影響の理解。対処法の模索等）	パワーポイントで視覚的に分かりやすいように説明し、問題提起しながらアンガーマネジメント等について一緒に考えた。
保健室ギャラリー	・他者への関心の向上 ・会話のきっかけ ・自発性の向上	児童生徒と教職員を対象にお題を決めて募集したイラストや児童生徒の作品（イラスト・習字等）を保健室前廊下に掲示した。

２　考察

「Ⅱ　課題設定の理由」に記述した教師の願う卒業後の姿に繋がる資質・能力が、各実践のねらいからわかった。各実践を整理すると、「伝える力」「対人関係スキル」「感情コントロール」「生きがい・やりがい」の4つに分けることができた。それぞれの力を身につけるための資質・能力を各教科や行事などを通して行われている。また、QOL 向上につながる要素は一つではなく、あらゆる学習活動の中で QOL 向上につながる視点を教師が理解する必要があると考える。

「伝える力」
文章表現力・情報収集力
論理性・自発性

「感情コントロール」
ストレスマネジメント・アンガーマネジメント
気持ちの切り替え

「対人関係スキル」
他者への関心／理解・思いやり・協調性・挨拶
言葉遣い・主体性・積極性・責任感
問題解決スキル・自己有用感・異性への理解

「生きがい・やりがい」
経験／視野の拡大
将来への可能性のヒント
余暇の充実

各実践をまとめたことで、「伝える力」「対人関係スキル」「感情コントロール」「生きがい・やりがい」の4要素は各教科や領域・行事などで関連付けながら指導していることが分かった。教師と生徒のマンツーマンでの個別指導や集団指導、気持ちの切り替えやストレスマネジメントなど自分と向き合うことが必要な「感情コントロール」、依頼する力や相互理解に代表される「対人関係スキル」、分かりやすい言葉や表現が必要な「伝える力」、達成する事や尊敬など「生きがい・やりがい」についても、教科指導以外に様々な行事や自立活動を通した活動から学ぶことができる。今後はキャリア教育とのつながりや類型・各学部段階といった観点と合わせて考察する必要があると考える。

また、成功体験の積み重ねを重視して指導・支援していることも明らかになった。水泳学習や体育の授業を例に挙げると、授業を通して学んでほしいことは、「回数を重ねることでできるようになることが増える」、「補助具や支援機器、ルールを工夫したり自分たちで考え出したりする力を養う」ことである。学校教育で身に付けてもらいたいことは、卒業後に何かを取り組む前にあきらめないことや、自分達で工夫を凝らして何か企画をしたり発信したりする力を身に付けさせることである。学習活動や行事を単なる成功体験で終わらせず、成功体験を通して自信をつけ、「自分にでもできる」「あの時のようにやってみよう」などと思えるように指導していくことが大切であり、そういった積み重ねが自己有用感・自己効力感の向上に繋がると考えた。それらを基に児童生徒自身が QOL 向上について考え、試みる姿勢を培うことを目指していきたい。

水泳学習事後アンケート（資料１参照）を分析すると、「１年生の時に比べると怖いという気持ちはなくなり（略）」「最初は、怖かったけど、楽しかった。」といった感想から回数を重ねることで恐怖心が薄れ、楽しむことができるようになっていることがわかり、「背浮きでチャレンジすることが大事。」「来年は背浮きマックスになりたい。」という感想から挑戦する姿勢が伺える。「普段でもリラックスすることが大切だと感じた。」「自分一人で浮けるようになったり、挑戦すればたくさんできることがあるのではないかと水泳学習を通して感じることができた」などの感想からは、水泳学習を通して得たものを生徒自身が発展させて考えることができており、教師がねらう獲得した資質・能力を活かすという段階に繋がりつつあると言える。教師が意図して指導することはもちろんだが、児童生徒自身も学んだことが何につながるのか、何のために学んでいるかを理解できるよう指導していくことで獲得した力を生活に活かしやすくなると思われる。

仮説の検証は行えていないが、学校だからこそできる経験の場を多く設定し、経験を通して得たものが QOL 向上の一助となると考える。資質・能力を獲得することが目的なのではなく、獲得した資質・能力をどのように活かして卒業後の生活を充実したものにするか（QOL の向上）が目的であることを教師は強く意識して指導していく必要があると考える。

カ. 今後の課題

本研究において検証が十分になされていないということが課題として挙げられる。当初予定していたアンケート調査が実施できず、研究の軸が途中で変わってしまったこともあるが、各教科等における実践は教師の主観による評価である。あくまで教師が意図して指導しているものでしかなく、児童生徒が資質・能力をどれだけ獲得できたか測ることができていない。標準化された尺度を用いたり学習活動の前後でアンケートを実施したりするなどして根拠となるデータを集積し、指導方法や指導の場について検討する必要がある。

さらに、教師が児童生徒の卒業後の姿や病棟での生活を十分把握する機会が少ないことが課題であり、病棟生活の実情や入院している患者の思いを知ることができなければ、願いはただの押し付けになってしまいかねない。児童生徒が暮らす環境について教師が理解を深めたり、病院職員と連携を図ったりすることで、QOL 向上に必要な資質・能力をより深く且つ多角的に捉えることができる。さらに、児童生徒の生活を支えている病院職員が教育に求めるもの、病院のニーズに応えられるような教育の在り方、学習内容についても考察し、連携していく必要があると考える。

＜資料1＞

水泳学習アンケート

3回の水泳学習を終え、事後学習後にA・B1類型の児童生徒を対象に行ったアンケートの集計結果

1. 水泳学習はあなたにとってどうでしたか？　・得意:2名　・普通:7名　・苦手:1名

2. 他の学校で水泳の経験はありますか？　・ある:8名　・ない:1名　・未記入:1 名

3. あなたにとって水泳学習はどんな学習ですか？（複数選択可能）
・楽しい:8名　・ふつう:3名　・楽しくない:1名　・うれしい:2名　・こわい:1名　・やりたくない:0名
・取り組みやすい:7名　・取り組みづらい:0名　・仲間と楽しめる:4名　・仲間と楽しめない:1名
・その他:自由記述なし

4. 浮き具を使わないことに不安を感じたことはありましたか？　・ある:5名　・ない:5名

5. ヘルパーの先生と安心して学習できましたか？　・できた:10名　・できない:0名

6. ヘルパーの先生は信頼できましたか？　・できた:10名　・できない:0名
自由記述:できだけど浮き具がないからやっぱりこわい

7. ヘルパーの先生と浮き具ではどちらが安心できますか？
・ヘルパーの先生:9名　・浮き具:0名　・どっちも:1名

8. 水泳学習で、できた！挑戦したい！私ってやればできる！という気持ちになれましたか？
・なれた:8名　・なれなかった:2名

9. 3回目の水泳学習で曲をかけながら泳ぐ学習は、リラックスしてできましたか？
・できた:9名　・できなかった:0名　※3回目欠席者:1名

10. 回数を（年数）重ねることに変わってきたことはありますか？あると答えた人は、何が変わったか記入をお願いします。　・ある:6名　・ない:4名

・落ち着いて参加できた。（小学部６年）
・１年生の時に比べると怖いという気持ちはなくなり、ヘルパーの先生を信頼して水泳学習に取り組めるようになった。（高等部３年）
・一人で浮くことができるようになってきた。リラックスしながら力を抜くことができた。（高等部３年）

・水に対する怖さ。（中学部２年）
・水に慣れることができた。ヘルパーの先生を信頼して楽しんで水泳学習に取り組めた。（高等部３年）
・最初はちょっと怖いなと思っていたが、回数を重ねると楽しいに変わることができた。自分がどんどん上手になっていくのも感じられた。（高等部１年）

11. 背浮きができるようになるためには何が必要でしたか？

・リラックスすること。（小学部６年・中学部１年・２年）
・力を抜くこと。（高等部１年・２年）
・頭や身体の力を抜いて、ヘルパーの先生に身体をゆだねること。（高等部３年）
・力を抜く、リラックスをする。（高等部３年）
・力を抜いて頭を右側に向いたら、浮くことができた。目に水が入っても気にしない。（高等部３年）
・水を怖いと思わないこと、考えすぎないようにやる。（高等部３年）
・身体に力を入れすぎないようにリラックスすることが必要だなと思った。またヘルパーの先生のことを信頼することも大切になるなと感じた。（高等部１年）

12. 最後に一番重要な質問をします。水泳学習で感じたことはありますか？

・ヘルパーの先生を信頼することが重要だと気づけた。背浮きでチャレンジすることが大事。話を聞いて取り組むと楽しむことができる。（高等部３年）
・最初は、怖かったけど、楽しかった。来年は背浮きマックスになりたい。（中学部１年）
・普段でもリラックスすることが大切だと感じた。（中学部２年）
・仲間と楽しんで取り組むことが大事。ヘルパーの先生を信頼することが楽しむことにつながる。（高等部３年）
・自分一人で浮けるようになったり、挑戦すればたくさんできることがあるのではないかと水泳学習を通して感じることができた。みんなとゲームプログラムができてとても楽しかった。（高等部１年）